

コロナ禍以後の観光

——「一般生活者・一般観光者」の民俗的視点から——

Tourism after the COVID-19 Epidemic Disaster
— from the Viewpoint of the Folk Lifeworld of
Ordinary People and Tourists

橋本 和也*

要 旨

「一般生活者」「一般観光者」の生活の立場から、今回のコロナ禍と観光について、「地のもの」の民俗的世界観を基盤に据えた考察を試みる。2020年4月7日からの緊急事態宣言と外出自粛要請で明らかになった点は、「一般生活者・一般観光者」にとって直接対面による「おしゃべり」と「雑談」、そして忌避すべき対象とされた「3密」は、決して「不要不急」の事柄ではなく、ごく普通の生活を送る一般生活者・一般観光者にとっての「生活必需品」であったということであった。一般観光者は特別な存在ではなく、一般生活者が「楽しみ」のために「うち」を一時的に離れれば一般観光者となり、「うち」に戻れば一般生活者となる。一般生活者と一般観光者は、「うち」と「そと」と同様、一つのモノの両面であり、ここに両者を同時に語る意味がある。われわれ一般生活者・一般観光者の「民俗的世界観・観光観」においては、荒ぶる神（災害）も、マレビト神（幸い）も、地のモノ（自然、動物）も、ヒト（客）も、人工物もすべて、「対峙」すべき存在としてしっかりと見据え観察し、「儀礼」をもって迎え、そして送り出してきた。この「地のもの・

*京都市文教大学名誉教授

モノ」の視点からは、すべてのモノとの「対応」「交渉」を可能にする「民俗的」世界観・観光観が拓けてくるのである。ポストモダンの特徴として境界の融解があげられるが、民俗の世界では人間と非-人間の対立はすでに融解していた。今日の「ホストとゲストの対立融解」の現象は、この世界観から再考されるべきである。さらには「自然（非-人間）と人間の対立融解」への視野をもって、災害に「対峙」する民俗的世界観・観光観を基盤にした「地域文化観光論」を新たに構築する必要がある。

Abstract

This paper tries to explore the tourism after the COVID-19 epidemic disaster from the viewpoint of the folk lifeworld of ordinary people and tourists. The declaration of a state of emergency and the government's request for avoiding going outdoors prove clearly that the direct face-to-face "chatting and idle talk" and "Sanmitsu (3密)" (close and intimate distance, closed space and tight cluster) are not "non-essential or unnecessary" but the "necessities of life" for us, ordinary people and tourists. The ordinary tourists are not special. If the ordinary people leave home or "uchi (うち)" to the outside or "soto (そと)" for pleasure, they will be ordinary tourists. And if they come back home, they will return to ordinary people. The ordinary people and the tourists as well as "inside and outside" are both sides of a matter. In our folk lifeworld we confront with awe and fear a violent deity (or disaster) and a guest god (or blessings), earth beings (nature, animals), human beings, artifacts etc. in a similar way. And we inspect closely, welcome with ritual and hospitality, and send off them alike. The viewpoint of earth beings clears the path to the folk lifeworld which will confirm the possibility of coping and negotiating with all things. As a feature of postmodernity we can indicate "fusion of boundary" but in our folkloristic world we have already witnessed the fusion of boundary

between human and non-human. The today's fusion between hosts and guests must be investigated from the viewpoint of folk lifeworld. And the fusion between human and non-human will clear the path to a new "local culture tourism" based on this folk lifeworld.

キーワード：一般生活者、一般観光者、民俗的世界観・観光観、うちとそと、人間と非 - 人間、二項対立の融解、地域文化観光

Key words : ordinary people and ordinary tourists, folk lifeworld, "uchi (inside)" and "soto (outside)", human and non-human, fusion of binary opposition, local culture tourism

1. 「一般生活者・一般観光者の生活の立場」 —民俗的世界観—

政府による「緊急事態宣言」にともない各地方自治体は「外出自粛・休業要請」によって人びとの移動を制限し、これまでの人出の80%減少を目標とした。この移動自粛要請は、「日本モデル」といわれ海外からは奇異な目で見られた。為政者を批判しながらも、外出を自粛し、他人に迷惑をかけないようマスクを付ける。高い衛生環境と基礎的生活習慣を基盤に、国民が社会のためにおこなう自発的な努力を引き出すのが「日本モデル」だ（篠田）¹⁾といわれた。また、法制上のロックダウンができない状況の中で、日本人の衛生観念に支えられ、自主的行動変容を求めるという緩やかな規制でコロナに対応するやり方は、生ぬるく見えるが、長期化が避けられない中で、比較的問題は少なく、持続可能なコロナ対策といえる（細谷）²⁾との見解もあった。

1-1 民俗的世界観

ここで「日本モデル」なるものについての明確化が求められる。筆者はそ

のような日常衛生習慣が、不浄なる「そと」から清浄なる「うち」をまもるといふ「民俗的慣習」に依拠していることを明らかにした大貫恵美子の『日本人の病気観』（1985年）に遡って考え直す必要性を強調したい。しかしその「そと」は、大貫も指摘するように、他人の汚れやばい菌に溢れた「ひとごみ」（街なか、列車内など）という社会の「周縁」を指すだけではない。不浄なはずの「そと」のさらにその外側には「完全な外部」が措定されており、その具体的現象形態として病気を治癒し予防したりする自然の諸要素、古代のマレビット神などがあげられる（大貫、1985, p.68）。それらは「アイデンティティの欠如」という特徴をもち、不定形（風・水）で、共同体に社会的位置づけのない存在（マレビット神、異邦人）であり、いかなる力をも吸収する存在である。それらのもつ創造的要素を内部領域に導入するための文化的方法として「儀礼」があり、その儀礼に携わる「賤民・職人」などが「媒介者」として重大な役割を果たしていたのである（大貫、1985, p.68）。

コロナ禍で生命の危険が予測されるにもかかわらず、どこかに隙間を見つけて「そと」へ出たいとわれわれ一般生活者は希求する。「ロックダウン」が施行された海外では無断外出者は罰金を課されたり、逮捕されたりする場合もあった。ここで問うべきは、なぜ人はかくも「そとへの移動」を欲求するのであろうかという、「観光」を考えるうえにおいても本質的な疑問である。コロナ禍の状況においては、生存と社会秩序維持のために「そと」を拒否され、「うち」にいることを強制された。その窮屈ではあっても清浄性が保持され安全とされる「うち」からの「開放」として、「そと」は措定されていたのである。一方、東日本大震災などでは「うち」（自宅）という安全で清浄な場所を喪失し、「そと」（避難所）で人とのつながりによって生存を保つことを強いられた。「そと」にとって「うち」は、そして「うち」にとっての「そと」は希求され憧れの対象となった。しかし実は、それ以上に両者はそれぞれにとって必要不可欠な存在であり、われわれにとって重要なのは、「そと」だけでも「うち」だけでもなく、両者がともにあることであった。

今回もふくめて災害時に明らかになったことは、一般生活者・一般観光者の「民俗の世界観」にとって、「うち」と「そと」は二項対立的に設定されているのではなく、「そと」には「うち」が、「うち」には「そと」が必要不可欠な存在であり、絶え間ない両者間の「往還」のなかにわれわれ一般生活者・一般観光者の「日常」が措定されていることであった。それゆえ一方が欠如する状況が訪れると、他方はそれを、全存在をかけて希求したのであった。一般生活者・一般観光者（以後、一般生活者・観光者と省略表記する）にとって「そと」への移動（＝観光）は決して不要不急のものではなく、「生活必需品」であることを認識すべきである。

1-2 直接対面による「雑談」の重要性

新聞などでは都市のロック・ダウンをおこなわず国民への自粛要請という対処法を「日本モデル」と呼んでいるが、それは他民族との差異を強調するナショナリズムの名称であり、一般生活者・観光者を対象とした考察には相応しくないように思われる。ここでは一般生活者・観光者による「民俗的対応」と呼ぶことにする。

新型コロナウイルス感染症対策の専門家や政策立案・執行者ではないわれわれ一般生活者・観光者は、対処法として「他者」を「畏・恐れて」近づかぬよう、「他者」との「身体的距離」を維持して「3密」を回避し、「非接触」をモットーとして「移動自粛（巣ごもり）」を要請された。口からの飛沫に直接触れぬように1.5～2メートルの距離を（身体的距離として）保ち、飛沫の飛散防止のためのマスク着用を要請された。はたして、一般生活者・観光者に「密なる交流」の自粛・禁止（新たな生活様式）を要請する必用はあったのだろうか、そしてそれは可能なのかを考えるべきである。

① 一般生活者・観光者にとっての「密接」「密集」「密閉」のもつ意味

この「3密」の意味をあらためて明らかにする必要がある。われわれは人

と人の関係を考える上で、これまで農山漁村における人と人のつきあい方・相互扶助のあり方を「理想」として引き合いに出す傾向がある。つきあいの煩わしさ・大変さを捨象している面はあるが、同じ環境・境遇でお互いをよく知り、助け合いながらの生活が「密接な相互関係」をもとにして築かれていることを理想として語る。人びとが集まる祭りや寄り合いでの「密集」は村落生活では必要不可欠である。とくに儀礼や寄り合い後の「なおり」での「密接」「密集」そしてときに「密閉」状態での共食は、村落を維持していく上で必要不可欠な要素であった。

このような理想的と思われる人間関係が育まれていた農山漁村は、いまや過疎化・高齢化社会と化し、閉村状態となっている所も多い。一方、都会ではそのような人間関係を意図的につくり出そうと居酒屋などでは、客同士が交流を深める機会を提供し、「他者」同士が「密集」し「密接なる」関係を楽しむ場が構築されてきた。そしてさらなる「密接」を演出するナイトクラブ・ホストクラブなどは、その「濃密な密着度」ゆえに危険視され規制対象となった。ロックバンドの演奏会場となるライブハウスは「3密」を必須条件とし、ファンはこの「3密」をライブの楽しみの重要な要素として認識する。密閉空間に密集したファン同士が飛沫を共有して絶叫し、汗まみれの身体をジャンプさせて盛り上がる。ライブハウスにとってはこの「3密」こそがその存在意味を支えていたのであった。

この「3密」は、一般生活者の社会関係の「生成と維持・更新・強化」にとって必要不可欠であるがゆえに、緊急事態宣言下においても規制が最も難しい対象であった。少しでも規制が緩むとその隙間をぬって現れ・わき出るのが「3密」であった。一方、毎朝の通勤時における電車内での「他者」との「3密」は一般生活者にとっては忌避すべき対象であった。テレワークが可能であれば、都会の住居を離れてより広い居住空間で仕事をし、たまに都会に出向いていく「新たな生活様式」を望む人々が多くなった。滋賀県の感染対応機関が調べたところ、自粛規制の効果は人びとが目にする大都市の市

街地には現れたが、地方のショッピングモールなどには若者たちのグループの出現が多く見られたという。「つれ」「仲間」とのたわいもないおしゃべりが「生活必需品」となっている10代・20代の若者にとって、群れて話す「雑談」の必要性があらためて顕在化したといえよう。

② 密接対面の必要性

学校・ホテル・観光施設・居酒屋・百貨店・ライブハウス・接待業など人による「密集・密閉・密接」的混雑が予想される施設の休業が要請された。このとき、行政による自粛要請の対象は「混雑の因子となる国民・市町村民」の「移動」であり、また医学的には新型コロナウイルス感染拡大要因となる無自覚感染者の「移動」であった。人々は物理的に移動をする「ウイルスを運搬するモノ」としか見なされていなかった。それゆえ対応策も必然的に「モノの移動制限」でしかなかった。日常生活を営む一般生活者・観光者にとってなにが「不要不急」で、なにが必須の「移動」であるかについての配慮はなされぬまま、その後の長引く自粛生活のなかで一般生活者・観光者からの憤懣が噴出した。その原因は、一般生活者にとって「生業」に携わることがいかに重要か、また一般観光者にとって何が重要かについての配慮が欠如していたことであった。このコロナ禍における移動の「自粛・制限」状況下ではじめて「一般生活者・観光者」とはなにかという概念を明確にする必要性と、日常生活・観光で何が重要であったかについての疑問が出現したのである。

コロナ禍の状況下での「3密」回避・自粛要請で明確になったのは、一般生活者・観光者にとって社会関係の生成・維持・更新・強化のために重要なのが実は「密接対面」であったことである。前田正治は新聞紙上³⁾で、「食事はおしゃべりを控えめに」「対面ではなく、横並びで」「親族行事は多人数での会食は避けて」という「新しい生活様式」は永続すべきではないという。「食事中的コミュニケーションはきわめて重要で、顔を合わせて愚痴をこぼ

し合う大切な時間だ。私たちは食事を分かち合い、その日の苦労を互いにねぎらう長い歴史を重ねてきた。あくまで感染収束までの臨時的な様式である」と釘を刺す。

一般生活者はこれまで日々の通勤・通学や、街なかでの買い物や外食などの「日常的な移動」を当たり前におこなってきたが、今回それは「3密回避」の名目の下で制限された。長期にわたる人びとの移動制限は、かえって一般生活者・観光者にとって「日常的移動」と「観光的移動」の意味と重要性を明確にするきっかけとなった。重要なのは「うち」なる空間から少し離れた場での、「よそのうち」に属すが「そと」と「うち」の境界領域に位置する仲間（つれ）との対面的接触による、後に忘れてしまうような何気ない内容だが、楽しかったという記憶だけが残るような「雑談」の必要性・重要性であった。観光や旅の時間には、目的地での観光行動の他にこの重要な「雑談」の機会が含まれている。また「公式」の会議やミーティングの合間に交わされる直接的対面状況での「雑談」が人間関係の生起・継続・更新・強化には重要であった。それは「本音なるもの」や「ひとがら」に触れる機会を提供していたからである。移動制限・自粛によって寸断され、疎外されたものがこの一般生活者・観光者にとって重要かつ必要不可欠な「日常的なつながり」であった。前野隆司は、このつながりは「心の生活必需品」であるという⁴⁾。おしゃべりや「雑談」は、決して「不要不急」の事柄ではなく、ごく普通の生活を送る一般生活者・観光者にとっての「生活必需品」であったのである。

災害時には通常一般生活者・観光者は悲観的で視野が狭くなる。このコロナ禍においても、不安が過度に助長され、身動きがとれなくなり、急激な変化の中でどうしていいか分からなくなった。みなが、この想定外の非日常的な事態を俯瞰的に見て、利他的に互いに助け合おうと考えられるわけではない。そのなかで「日常的移動」による対面的接触こそが、人と人とのつながりを担保し安心感をもたらすための「必需品」であり、困難な生活のなかで唯一頼れるものであることを実感した人も多かったという。不幸中の幸いで

あったのは、インターネットの発達で、つながるためのツールに最も恵まれた状態でコロナ禍に遭遇していることだと前野⁵⁾はいう。テレワークやオンラインでの会議・ミーティングなどの「公式」な接触のみならず、「オンライン帰省」し、離れた両親とネット上で同時に食事をとる「オンラインご飯」を共にすることも可能になっている。さらには仲間内での「オンライン飲み会」も頻繁に開催され、これまで培ってきた仲間のつながりを「オンライン雑談」で維持する努力が各所で見られている。これは現代の技術を使いながら、一般生活者にとっての重要なつながりを維持するための「民俗的工夫」であるといえよう。

1-3 「一般生活者・観光者」の概念

この緊急事態宣言下における「移動・観光」自粛要請には、先にも述べたとおり、通常は気づかぬささやかなものではあるが「生活」にとって何が必要不可欠なものなのかについての考慮が欠如していた。「一般生活者」の日常生活にとって、そして「一般観光者」の通常の観光生活にとって必要な「そとに行くこと」とは何であるのか、そもそも一般生活者さらには一般観光者の存在について考える必要があるのかどうかさえも問題にされなかった。それについて考える機会が訪れたのは、「新型コロナウイルス感染」の第一波が一段落し、第二波への危機感が募る中で社会科学系研究者たちによる「ポストコロナ時代」を展望する議論が開始されてからであった。「一般生活者・観光者」という概念自体も、いわば当たり前すぎて、これまで問題として浮上してこなかったものであった。

この「一般生活者・観光者」という用語は、『観光と環境の社会学』（古川彰・松田素二, 2003）のなかで鳥越皓之の「生活環境主義」の考えに基づいて使用されている「普通の生活者・地域生活者」を参考にしている。この「生活者」は、さまざまな知恵や制度が埋め込まれた生活世界で普段暮らしを営む人びとで、ローカルな地域社会が生活のなかで育んできた知恵と実践

を、現代的状況のなかで見直し、外部からの諸力と交渉しながら自分たちの生活システムを保全し、それと連動するかたちで環境保全をおこなってきた。地域社会が生活のなかに埋め込んできたユニークな環境保全の論理と、時には自然に積極的に手を加えるこれまで論理化されなかった生活システム優先の思考と実践をあらわすスローガンとして採用したのが「生活環境主義」であった(古川・松田, 2003, pp.214-215)。その考えに基づいて、地域の人びとが観光者をいかに迎えているかを検証したのが『観光と環境の社会学』であった。「当該社会に居住する人びとの生活の立場」に立ち、生活保全を図る上で環境を保護し、「小さな共同体」が重点を置くべき生活システムを尊重し、たんなる「居住者の立場」からの既得権の守護ではなく、「居住者の生活の立場」を考慮した観光のあり方を模索していた。一方で注意すべきは、「自然との共生」言説は都市の論理に回収され、そこで暮らしを営む人びとの現実を神秘化してしまう危険(古川・松田, 2003, p.2)があることであった。

一般生活者に関しては、「普通の生活者」「地域生活者」の概念を参考にしているが、一般観光者という概念はそれからさらに派生したものである。一般観光者にとって一般生活者は「そと」の存在であり、観光のまなごしの対象となる。一般生活者にとって一般観光者もまた「そと」の存在であり、迎える(時に拒否する)対象となる。ここで重要なのは、一般生活者は同時に一般観光者でもあるという点である。一般観光者は特別な存在ではない。「楽しみ」のために「うち」を一時的に離れば一般観光者となり、「うち」に戻れば一般生活者となるのである。「うち」と「そと」、一般生活者と一般観光者は、一つのモノの両面である。ここに「そと」と「うち」を、そして生活者と観光者を同時に語る意味がある。

1-4 危機に「対峙」する一般生活者・観光者の「民俗的世界観・観光観」

今回、新型コロナウイルス感染症対策の専門家や政策立案・執行者ではな

いわれわれ一般生活者・観光者は、「そと」の脅威に対し「うち」に籠もることを、すなわち「移動の自粛」を要請された。突然の自然災害や疫病に対し一時的に避難し、危険を避けることは当然である。そしてある程度の時間の経過とともに、対象を見据えて「対峙」しながら、それぞれの事情に応じて一般生活者は各自が各所でより適切な対応の仕方を模索しながら「生命」と「日々の生活」を保持する方法を見つけている。

日本における民俗の世界観では、「マレビト」は海の彼方の老いも死もない世界より、村々を定期的に訪れる古代日本の神である。その神は村人に幸運をもたらすために巡回しているが、危険をもたらす潜在力もあわせもつ。古事記における須佐之男命が、すべての災難と無秩序の原因であるとともに救済をもたらし破壊の後の創造を象徴しているように、「マレビト」も両義性をもっており、肯定的、否定的どちらの働きもなす存在である（大貫, 1985, pp.54-55）。民俗的世界では、荒ぶる神にたいしては「恐怖」しながらも儀礼をもって迎え、大切なものを奉納して荒御霊を鎮めてもらい、送り出す。「マレビト」神に対しては「畏怖」しながら定期的に迎え、饗応をして幸運をたまわり、送り出す。しかし、対応を誤ると危険がもたらされる。そして現代の「観光」においては、観光者を「客人」として迎え、接待をして、よい思い出とともに送り出す。そして「交流」においては、仲間として迎え、「ともにあること」を楽しむのである。

一般生活者・観光者たちは、「よそのうち」に属しながらも、「そと」と「うち」が重なる境界領域に位置する日常的な接触相手である「仲間」との「共食」の場での「雑談」を何よりの楽しみとし、「生活必需品」である「日常的なつながり」を維持し更新・強化しているのである。今日の大衆観光の現場で失念しがちなことは、「客」（＝他者）が「恐怖・畏怖」すべき対象であり、迎える側はしっかりと観察しつつ「対峙」しなければならないという心構えである。今日の世界では10年に1度以上の割合で、何らかの自然災害（地震・津波・大雨・疫病など）や政治的・社会的・経済的困難に遭遇し

ている。危機に「対峙」する姿勢を常に保つことを今日の一般生活者・観光者は求められているのである。「訪問者」「観光者」を、荒ぶる神やマレピト神のように「畏・恐れ」をもって迎え、しっかりと相手の様子を見据えて「対峙」すべきである。「仲間」との「3密」は「生活必需品」であり、感染を回避しつつ必要不可欠である対面的な接触を可能にする方法こそが探られるべきである。

2. アフター・コロナ時代の観光について

近年の文化人類学の領域では「自然と人間」の関係について、それぞれの民族的・民俗的思考から西洋的な二項対立的発想を批判的に乗り越える試みが始まっている。それは先に述べた「民俗的世界観・観光観」につながる思考である。フィリップ・デスコラの「自然の人類学」、エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロのアメリカ大陸先住民の思考としての「多自然主義」と思考の永続的な脱植民地化の提唱や、マリリン・ストラザーンのメラネシア的思考の特徴である「部分的つながり」(2015)⁶⁾などで実践されている。ここでは、日本の「民俗的世界観・観光観」における「そと」からの脅威に対する「民俗的対峙方法」について考えてみよう。

2-1 災害と「対峙」する

対峙とは、とくに想像もつかぬような「大きな」存在に対して、「畏れ」を抱きつつも臆することなく向き合って立ち続けることをさす言葉として本論では使用している。それは自然と人間との関係のあり方でもある。2011年3月の東日本大震災での津波被害への対応として2つの方法がとられた。いわば近代合理主義的・科学的な対応としては、波の高さが10m以上だったことを受けて、宮城県・気仙沼市などは巨大防潮堤の建設を選び、沿岸部65カ所で全長約40km、最大の高さが14m以上の堤防を造設した。海岸線を走る

車や近くの建物、そして人間の視界から海が排除された。これは今日のコロナ禍の状況においては、他者を恐れて近づけず、「ロックダウン」によって隔離・遮断をおこない、「非接触」状況をつくり出す発想であり、短期的に結果を求める対策である。それに対し「民俗的対応」とでもいえるのが女川町方式で、防潮堤を結果的に拒否した。「ハード面の強化だけでは完璧な防災を目指すことに限界がある」と考え、新しいまちづくりの基本理念として「防災」よりも「減災」を掲げた。町民の命を守るために、「避難するための情報を確実に伝え、避難のための道路や場所を確保する」というソフト対策に重点を置いたのである⁷⁾。リスクを引き受ける民俗的対応といえよう。



女川駅 海に見える駅⁸⁾

これは海も山も「地のモノ」で、相互に対話が可能だと考える世界もあるという「多自然的」発想（ヴィヴェイロス・デ・カストロ、2016、pp.41-79）であり、「海との交渉」を可能にする「海にひらかれた世界」を選択したのである。「自然と人間」を二項対立的に捉える近代的思考からは、津波対策に10m以上の堤防設置という発想しか生まれえない。自然も、動物も、人工物も、ヒトも、カミも対峙すべき存在としてしっかりと観察し、そして迎える「世界観」からは、すべてのモノとの「対応」「交渉」を可能にする「民俗的」

世界観・観光観が拓けてくるのである。現状のコロナ禍においては、マスクや消毒などの対策をとり、距離をとりつつ対応するという近代科学的・合理的なやり方がまず前提となるが、それを踏まえつつ観光者（他者）と「対峙」し、民俗的工夫をもって「そと」と「うち」の境界領域にいる「仲間」のように迎え、歓待・交流し、そして送り出すやり方を発見・創造する必要がある。

2-2 民俗的対応：流れ橋、沈下橋、畳堤

通常の橋を架けても季節ごとの洪水によって流されてしまう場合には、「流れ橋」や「沈下橋」などの民俗的な考案が見られる。流れ橋は、固定されていない橋桁と橋板が橋脚にワイヤーロープで繋がれているだけで、水が引いたあとにロープを手繰り寄せて橋桁と橋板を元に戻す仕組みである。京都府久世郡久御山町と八幡市を結ぶ木津川に架けられた「上津屋橋（こうづやばし）」は、橋の強度を強めて水の圧力に耐えようとする「近代科学的」発想ではなく、構造物の一部が流されてしまうことによって破壊に到る圧力を受け流すという考え方に基づく柔構造の設計（民俗的発想）である。また、欄干のない木造の橋で周囲の景観が整っていることもあり、時代劇の撮影現場としてもよく知られており、多くの観光者が訪れている。近年は、復旧までに数ヶ月かかることや、数千万円単位の修繕費が発生することから批判もでていたが、2013年の流出後には流れ橋交流プラザの来場者が増加し、橋が流れること自体が観光の大きな魅力となるために、永久橋への架け替えに反対する声が強くなった。従来の「流れ橋」構造と景観を維持したまま75cmかさ上げして復旧することになったという⁹⁾。

四万十川には増水時に沈んでしまうように設計された「沈下橋」が架けられている。流木などが引っかかって壊れるのを防ぐため欄干がなく、幅が狭いので通常は車が一台しか通れないが、見通しがよいため対向車が通過するまで橋のたもとで待機する暗黙のルールがある。これも「一般生活者」の民

俗的工夫であるといえよう。「清流」四万十川とこの沈下橋を目的に多くの観光者が訪れている。水面までの距離が短いので、橋の中央にたたずんで「清流」を間近に満喫することができる。

また、新聞では特殊堤防「畳堤」を「景観に配慮した止水対策」として紹介していた¹⁰⁾が、これを単なる「景観への配慮」と考えるのは、本論で問題にしている「民俗的対応」についての配慮がかけられているといえよう。高い堤防の建設が検討されたが、「家から川が見通せるようにしてほしい」との地元住民の要望を受けて整備されたのが3.1kmの「畳堤」であった。兵庫県たつの市の揖保川（など国内に3カ所）にあり、川が増水すると住民らが倉庫などで保管する畳を持ち寄り、コンクリート製の溝に1500枚の畳を差し込むと堤防が1メートルほどかさ上げされる。畳は水に接すると膨張し、強度が増すので、土嚢を積むより作業が軽くなり、平時は川を見渡することができる。

新聞が引き合いに出す「景観」とは、ジョン・アーリも述べているように、そこを走り抜けていく鉄道などがつくり出した「新たなパノラマ」である。環境を自分と分離した実体と見なし、それによって「まなざしと風景との虚構のつながり」がつくり出される（アーリ, 2015, p.153）のである。人びとが住まい、実用が見られる土地から旅行者を切り離し、早々と過ぎるフレーム・パノラマとして眺められるようになったものが「景観」である（アーリ, 2015, p.154）。しかし、ここでとりあげた川や海は、そこで一般生活者が生存を保つために実用の対象とし、かつ変化を見逃すまいと毎日観察する対象である。「景観」という語に回収されてはならない。「景観を損なわない止水対策」との説明がついていたが、むしろこれは恩恵をもたらしながらも時に災害をもたらす「自然」に畏怖と恐怖を抱きつつ、「対峙」する一般生活者の「民俗的対応」というべきである。

2-3 「民俗的世界観」からの「ホスト・アンド・ゲスト」論再考

一般生活者・観光者の「民俗的世界観」においては、「自然と人間」そして「ホストとゲスト」の関係は二項対立的ではなかった。両者の境界融解のあり方に注目すべきである。民俗的世界では人間と非-人間は二項対立的に對置してはいなかった。柳田国男の『遠野物語』（柳田, 1978年）を引き合いに出すまでもなく、昔話・伝説のなかでは人間と非-人間とをともに「うち」にも「そと」にも措定してきた。「異人」にさらわれたり、助けられたりした話、「異界」の山男・山女や雪女との遭遇譚、川童との駆け引き、そして家でのザシキワラシやオシラサマの物語などが掲載されている。また、山中深く分け入れれば山の神、天狗などと出会い、死者が住む「異界」を垣間見ることでもあった。「異界」の存在と友好的に接したり、秘密を守ったりすれば恩恵をもたらしてくれることも多い。民俗的世界観では、非-人間や靈的な「他者」をつねに「うち」にも「そと」にも設定し、恩恵をもたらす「ゲスト」だけではなく、害をもたらす「ゲスト」（自然災害・疫病・害虫・荒ぶる神）をも迎え、歓待（儀礼）をもって接遇し、送り出している。その世界観を考慮に入れた自然（非-人間）と「対峙」する「ホスト・アンド・ゲスト」論が必要となった。

さらには「ホスト・ゲストの対立融解」から「人間・非-人間の対立融解」への展望を拓く必要がある。あらゆる差異が融解するのがポストモダンの特徴であり、今日では「一般生活者と一般観光者」の境界と同様に「ホストとゲスト」の境界も融解している。しかしこの境界融解の現象は、一概にポストモダンの特徴というわけでもない。先のアメリカ大陸先住民や日本の民俗的世界観においては「人間と非-人間」の間の境界は融解していた。

自然と文化の対立、自然と人間との対立を措定してきたのが近代である。重要なのは、テーゼとアンチテーゼはともに真であるが、同一の現象を異なる相の下で把握しているのだと示すことであるとヴィヴェイロス・デ・カストロはいう。「精霊は人である」と述べることは、それらは人格であると述

べることであり、非-人間に、主体という言葉行為の位置を占めうる意識的な志向性と行為の力能を賦与することである。こうした力能は、これら非-人間が授かる魂や精神として対象化されている。主体とは魂を持つものであり、魂を持つものは誰でも視点（パースペクティヴ）を持ちうる（ヴィヴェイロス・デ・カストロ, 2016, p.53）。視点が賦与されるあらゆる存在は主体でありうる。魂を授かった動物や存在物は、それらが（変装した）人間であるがために主体であるわけではなく、それらは（潜在的に）主体であるがために人間であると考えるのである（ヴィヴェイロス・デ・カストロ, 2016, p.54）。パースペクティヴィズムは相対主義ではなく多自然主義であり、唯一の「文化」（不変の認識論）に多元的な「自然」（可変的な存在論）を対置するのである。

清水高志は「幹-形而上学としての人類学」で、「一なる対象」が「多なる対象」でもありうるということは、ただモノのうちに断絶を見出すことを意味するだけではなく、対立的にみられる二項が、いわば同じものの両面として扱われうることを示す。「主体と対象」「一と多」、そしてさらに「外部と内部」など、もろもろの二項対立を、脱分化された中性的な立場から捉えなおすことが問題であったという。さまざまな役割の付与は、「主体や対象」といった二項対立のペアが、複数交差する地点から出発して考察すると、主体や対象は、また同時に一としても多としても、扱うことが可能になる。さらに「個別と一般」を「一と多」「主体と対象」の二項対立に三重に交差させると、個別化と一般（普遍）化の運動そのものも、そこでは同じものの両面となるという。このようにして「一と多」関係、人間と動物という「主体と対象」関係が中性化する。その上であえて役割が割り振られることをデスコラやヴィヴェイロスなどは追っていることになるという（清水, 2016, p.252）。

ホストとゲストの対立も先に述べたように中性化している現状があり、自然災害も新型コロナウイルスも視点を持つ非-人間として捉える観点が必要

である。文化、すなわち主観的なものは普遍性の形相を帯び、自然、すなわち客観的なものは特殊性の形相を帯び、自然と文化のカテゴリーは関係的な布置、可動性のあるパースペクティヴ、つまりは視点を示しているという。それをパースペクティヴィズムといい、人間という存在が宇宙に住まう動物や他なる主体（神々や精霊、死者、宇宙の別の位階の住人、植物、天文学的現象、物体や人工物）を見る様態は、これらの存在が人間や互いを見る様態と根本的に異なるという（ヴィヴェイロス・デ・カストロ、2016, p.42）。自然災害も新型コロナウイルスも視点を持っており、主体として人格化されると捉えるのが、パースペクティヴィズムということになる。その世界では、新型コロナウイルスはどのような主体として現れるのであろうか。新しいのは、このハイブリッドが目に見えるようになったことであり、それによって私たちの分析的なカテゴリーが「取り違え=多義的（equivocation）であることに気づく可能性がひらかれる」（デ・ラ・カデナ、2017, p.64）ことなのである。

「客人を迎えること」は、資本主義的・市場経済的関係でゲストを受容することと同じではなく、それ以上の意味を持つ。それは、モノ（非-人間）をも含む「他者」を、土地のカミと人々の領域に迎えることである。「ホストとゲスト」を人間の枠内で捉えるならば、これまでと同様、「近代観光」の枠組に留まる。しかし、「地のもの Earth Being（山・川・植物・動物）」も、人工物も、疫病・災害もアクターと捉えるハイブリッドな世界を考える必要がある。前にも述べたように「自然と文化」を二項対立的に捉える近代的思考からは、津波対策に10m以上の堤防設置（気仙沼など）という発想しか生まれない。海も山も「地のもの」であり、相互に対話が可能だと考える世界もあるという「多自然的」発想からは、「海との交渉」を可能にする「海にひらかれた世界」を選択（女川方式）する道が拓ける。動物も、自然も、人工物も、ヒトも、カミも迎える「世界観」は、新型コロナウイルスも含むすべてのモノと「対峙」し、「対応」「交渉」を可能にする世界観・観光観であ

る。

2-4 そして「地域文化観光論」再考

近年の観光市場では、観光資源は「ストーリー付与」「意味づけ」次第で価値が出るといわれている。すなわちストーリーが一定程度の人びと（アニメオタクなど）に受け入れられ、「よく知られたもの」になれば、それを確認しようとする大衆観光者の関心を集め、ヒット商品となる。しかしそれは、「地域文化観光論」の視点からは「地域文化資源」の疎外というリスクを出現させる状況となる。地域が発見・創造したものに大都市の消費者が食いつくような「意味づけ」（＝ストーリー付与）をすれば観光商品として大ヒットするが、この商品化の過程で「意味・ストーリー」は単純化され消費しやすいものに変容する。外部の資本はこのように単純化された「分かりやすい言葉」を遣い、大衆に受け入れやすいものにして拡散し、一時的な「価値」をさらに増大して大量消費品となることをめざすが、すぐに飽きられ、短期的利益追求の対象で終わってしまう。地域の素材を使って外部資本が作り上げたストーリーは、地域を離れた実体のないイメージとして「そと」で大量消費され、「地域」にはなにももたらされない事例も多い。日本各地で見られる「ご当地キティ」「ご当地キューピー」「ご当地パンダ」もその例で、大仏キティ、舞子キティ、お遍路キティ、渦潮キューピー、横浜パンダなどなど、地域を離れて一同に集められ売買されることも多い。

① 「地域文化観光」の再定義

地域の一般観光者・一般生活者であるわれわれは、分かりやすく、手頃な値段の観光商品にまずは飛びつくが、愚かな消費者ではない。つねに「この値段ではこの程度であろう。この値段にしてはよい方である」と判断し、日常使いか特別な場合か、ニーズに応じた商品選択をする。「地域文化観光」とは、「地域の人びとが発見・創造（ときに借用）した地域の文化資源を、育

て上げ、発信する観光」(橋本, 2018)である。これを選択する消費者は現状ではそれほど多くはないが、必用と考える人びとはいる。この観光を創出するには地域での「意味づけ」をおこなう「地域人材」を育成・確保する必要があるが、これには都市住民のニーズを探りあらたに掘り起こすセンスが求められ、地域だけで育て上げることは難しい。しかし、「そと」にいながらもその地域のファンである人もまた「地域の人びと」であると考えれば、そのような才能を培った人材がその地域との交流をとおして、地域の立場に立った「意味づけ」に参加する例も多くある。その活動の中で「意味づけ作業」ができる人材を地域で育てることも可能となる。

現在のコロナ禍での観光の危機的状況を踏まえると、これまで議論してきた「リスクに対峙する」民俗的世界観・観光観に裏打ちされた「地域文化観光」に鍛え直すことが必用となる。「コロナとの共生」とのかけ声の中には、人間中心主義的な考え方しか見出せないのが実情である。新たな「地域文化観光」の生成過程では、それに関わる人間と非-人間(海・山・川、動物・植物、災害・疫病、人工物)などの「地のもの・モノ」すべてが主体として立ち現れてくる。ポストコロナ時代に「地域文化観光」創出に関わる主体は、そのすべてのモノが相互に対話・交渉するなかで、「地域文化資源」を発見・創造することが必用とされるのである。海・山・川の視点、動物・植物の視点、そして霊的なモノの視点などとともに「新型コロナウイルス」の視点をも「地域のもの・モノ」に含んだあり方を見極めねばならない。そのとき「地域文化観光」は、「人間と非-人間を含む『地域のもの・モノ』すべてが主体となり、相互に対話・交渉をするなかで立ち現れてくる『地域文化資源』に、地域で発見・創造(ときに借用)したストーリーを付与し、発信する観光」と新たに定義されることになる。

② 生活必需品としての観光:「民俗的観光観」より

「民俗的」観光観・世界観に裏打ちされた「地域文化観光」を推進するた

めには、まず「一般生活者・観光者」が「自然」や「他者」と「対峙」する民俗的な方法に自覚的になる必要がある。「そと」からの「緊急事態宣言・移動自粛要請」が到来し、それがわれわれの「うち」なる日常に変容を迫ったとき、緊急避難的にとりあえず家族とともに頭を低くして最初の波が通り過ぎるのを待つ。しかし時間の経過とともに少し頭をあげ、「そと」の様子の観察をはじめ、まず「うち」と「そと」のはざま（＝境界領域）にいる親しい仲間や近所の知り合いの安否を確かめ、必要な応急処置をとる。つぎにさらなる「そと」の存在である日常的なつながりのある仕事の同僚やつきあいのある人びとの様子をうかがうといった「身の丈に合った」対応をする。コロナ禍のなかで一般生活者であり同時に一般観光者であるわれわれがとった行動は、このような「地域のもの・モノ」としての「民俗的な対応」であった。まずは「生活世界」の安全を図り、その安全が確認できたときに、生活維持のための「うち」での「楽しみ」を模索した。これは生活世界を維持するための「生活必需品」としての「楽しみ」であった。

「地域のもの・モノ」の一員である人間は、「地域のもの・モノ」の視線を感じ取り、対応・交渉し、生活世界を維持する。いまは近代科学的・合理的な対応が優勢であり、マスクをかけ、消毒し、身体的距離を保ち、換気を心がけている。残念ながら流れ橋や畳堤のような民俗的工夫が活かされた対処法はまだ立ち現れていないが、方向性は見えている。生活に根ざした知恵を使い、リスクを減じながらも、一般生活者・観光者が仲間との「密接・親密」な「おしゃべり・雑談」と「そとへの移動」を可能する方向である。これはわれわれがごく普通の生活を送るための「生活必需品」である。一般生活者にとっての「観光的なるもの」の重要性は、「そと」に移動して「仲間」と会い、「雑談」の「楽しみ」を享受することにある。緊急事態宣言下の状況でこそ、事態にしっかりと「対峙」し、一般生活者・観光者の生活世界を見極め、「民俗的観光観」に基づいた「生活必需品」としての「観光」を案出する必要がある。

③ 「なりわい（生業）」としての「地域文化観光」

地域文化観光者は、よく知られたものを「確認」するだけの大衆観光者ではなく、地域の人びとが育て上げた「地域文化」を、交流を通して自ら「発見」し、観光体験を豊かに思い出深いものにしていく人びとである。今回のコロナ禍を機会に、女川町のように高い防潮堤を作らずに海と対峙するあり方や、流れ橋・沈下橋のような柔軟な構造を見習い、「地域文化観光」に携わる地域の人びとの基盤である「つながり」のあり方を鍛え直す必要性を強く感じた。都会におけるホスピタリティ産業（飲食業、宿泊業、接待業など）のなかには外出自粛要請による来店客数の急激な減少で、従業員の給料や家賃が支払えなくなり閉店を余儀なくされた店も多く見られた。一方、地域においては経済的基盤と労働形態を多様化することによって、現金収入が不足しても食べ物を自分の畑から調達し、助け合いながら生活を維持する、「民俗的」知恵にあふれた地域づくりが必用であり、可能でもあることが今回あらためて確認された。田畑、里山、里海などの地域資源は、観光資源・観光対象（景観）であるよりも、地域の人びとの「なりわい（生業）」の基盤であり生き延びるための資源であったのである。単一的に経済的利益を求める都会のホスピタリティ産業と、地域の人びとが「なりわい（生業）」の多様なあり方のひとつとして携わる「地域文化観光」との違いが明確になった。

近代産業社会においては仕事に携わる労働時間を中心に据えて日常生活を営み、労働から解放された余暇時間に本来の自分に立ち戻るといった生活スタイルを送ってきた。それに対し「なりわい（生業）」に携わる農山漁村などでは、田畑で農作物を作り、里山で山菜を採り、賃労働の機会があれば参加するなど、生きる糧をさまざまな源から手に入れていた。ポスト産業社会の今日では、都会においても単一の職業ではなく多業形態の働き方で複数の源から収入を得る方法が見られるようになったが、農山漁村では多業形態は生活を維持するための当然の姿であった。その「なりわい」の一つとして「地域文化観光」に従事するあり方が見えてくるのである。

④ リスク社会に立ち現れる「観光的なるもの」

観光者の来訪がなくても生き延び、来訪があったときには十分堪能してもらい、思い出深い豊かな「体験」を持ち帰ってもらえる「地域文化観光」にしなければならない。その「地域文化観光」で求められる「地域性」は、リスク社会に対峙する人びとの活動の中にあらたな姿で立ち現れてくる。そしてその「地域性」を育て上げる活動の中で主体となる「地域の人びと」もまた立ち現れてくるのである。一方、「観光的なるもの」は、どこにでも出現する。「地域芸術祭」におけるアートネクサスを考察する中で、「アートのなるもの」が「観光的なるもの」としても同時に立ち現れてくる状況を確認し、あらたに「観光ネクサス」という概念を導入した（橋本, 2021 予定）。それは市民マラソンや「よさこい踊り・よさこいソーラン」などの「スポーツ的なるもの」に関しても同様であった。「観光的なるもの」は「アートのなるもの」「スポーツ的なるもの」、そして今日の「リスク」を避ける行動のなかにも同時に出現する。全世界的な「新型コロナウイルス感染リスク」に直面する社会において必用とされる近隣での「健康ウォーキング」や、通信機器を使ったテレワーク・オンライン会議という新たな日常の中にも、「観光的なるもの」はそれを求める人びとの発想・工夫とともに立ち現れてくるのである。

毎朝決まった時間に集まっておしゃべりをしながらウォーキングや犬の散歩を楽しんでいた仲間は、夫婦や家族単位に分かれるようになったが、生命維持のために意識的にウォーキングを実践する人数は、自宅に軟禁状態になった一般生活者・観光者を中心に確実に増えた。健康ウォーキングではあるが、人はその中に「楽しみ」を見つけ出す。4月5月6月と京都郊外の公園では灌木の林の中に鶯の声を聞く。中には「谷渡り」を聞かせる鶯もいる。丘状の広場一面を埋め尽くすタンポポや紫露草などのなかを踏まないように歩く。小山を登るバイパスを歩きながら、側溝から顔を出した狸の姿を見つけて立ち止まり、自転車通学中の高校生に「たぬき」と思わず目配せをす

る。「観光的なるもの」の「楽しみ」は健康ウォーキングにも出現する。通信機器を利用した「オンライン帰郷」、離れた親子や仲間内での「オンライン食事会」、そしてまさにアットホームな「オンライン飲み会」など、家でくつろぎながら仲間との「雑談」を楽しむ工夫は、ある意味で「民俗的対処方法」であるといえよう。そこには新たな「観光的なるもの」が出現している。これまでの「観光」の定義では、物理的な「ホームからの離脱と異郷への移動」が必須条件であったが、通信機器の発達により「ヴァーチャル空間への移動」も定義に含まれることになる。そこでもそれなりの「非日常性」と「観光的なるもの」の「楽しみ」を経験することが可能となっている。

毎年数十万人を集める京都祇園祭の山鉾巡行が新型コロナウイルス感染症予防のために中止になった。大衆観光者のまなざしを集める華美で顕示的要素が前面に出る山鉾巡行と、宗教的要素の強い神輿渡御も中止になったが、疫神や死者の怨霊を鎮めなだめるという祭り本来の目的を果たすために、榊を白馬の背に立てた行列が町を練り歩く「御神霊渡御祭（ごしんれいとぎよさい）」を八坂神社は執行し、御旅所に榊を供えた。また「山鉾巡行」の代わりに山鉾保存会の代表者らも榊を手にして四条通りを歩いた¹⁾と新聞は伝えている。このように祭りの「観光的なる」部分は背後に退いたが、逆に「疫病退散」という御本体の神事自体は以前にも増して存在感を強めており、厄除けの粽の注文量も例年より増えているという。本来の「宗教的なるもの」が前面に現れ出たといえよう。これもまた祭り本来の意味を明らかにして強調する「民俗的対応」といえよう。

注

- 1) 篠田英朗、読売新聞 2020年4月30日 p.11
- 2) 細谷雄一、読売新聞 2020年4月30日 p.11
- 3) 前田正治、読売新聞 2020年5月30日 p.11
- 4) 前野隆司、読売新聞 2020年6月7日 p.7
- 5) 前掲4) 参照

- 6) フィリップ・デスコラの「自然の人類学」、エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロのアメリカ大陸先住民の思考としての「多自然主義」と思考の永続的な脱植民地化の提唱、マリリン・ストラザーンのメラネシア的思考の特徴である「部分的つながり」(2015)などの出典については参考文献参照。
- 7) ABEMA TIMES, 2017年3月8日8:40より
- 8) 女川駅 海の見える駅 <https://seaside-station.com/station/onagawa>
- 9) ウキペディア「上津屋橋」参考資料参照
- 10) 特殊堤防「豊堤」 読売新聞 2020年5月31日 p.26
- 11) 毎日新聞 2020年7月17日 22時29分

参考文献

- アーリ、ジョン 2015, 『モビリティーズ 移動の社会学』吉原直樹・伊東嘉隆訳 作品社
- ヴィヴェイロス・デ・カストロ、エドゥアルド 2016, 「アメリカ大陸先住民のパーспекティヴィズムと多自然主義」近藤宏訳『現代思想 人類学のゆくえ』臨時増刊号 Vol.44-5, pp.41-79
- 大貫恵美子 1985 『日本人の病気観 一象徴人類学的考察』岩波書店
- 清水高志 2016 「幹一形而上学としての人類学」『現代思想 人類学のゆくえ』臨時増刊号 Vol.44-5, pp.250-265
- ストラザーン、マリリン 2015, 『部分的つながり』大杉高志・浜田明範・田口陽子・丹羽充・里見龍樹訳 水声社
- デスコラ、フィリップ 2016, 「自然の人類学」矢田部和彦訳『現代思想 人類学の時代』臨時増刊号 Vol.44-5, pp.26-40
- デ・ラ・カデナ、マリソール 2017, 「アンデス先住民のコスモポリティクス 「政治」を超えるための概念的な省察」田口陽子訳『現代思想 人類学の時代』臨時増刊号 Vol.45-4, pp.46-80
- 橋本和也 2018, 『地域文化観光論 新たな観光学への展望』ニカニシヤ出版
- 2021 予定「移動を促す(誘発する)地域芸術祭 一アートネクサスと観光ネクサスの往還」『現代のツーリズム・モビリティーズ 一動きゆく観光と観光学』神田・遠藤・松本・高岡・鈴木編著 ナカニシヤ出版 pp. -
- 古川彰・松田素二 2003, 『観光と環境の社会学』新曜社)
- 柳田國男 1978, 「遠野物語」『定本 柳田國男集第四巻』筑摩書房 pp.1-54

ホームページなど

- ABEMA TIMES 2020年6月17日閲覧 2017年3月8日8:40
(<https://times.abema.tv/posts/2109847>) より。)
- ウキペディア「上津屋橋」2020年6月19日閲覧

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%8A%E6%B4%A5%E5%B1%8B%E6%A9%8B>
女川駅 海に見える駅 2020年6月17日閲覧

<https://seaside-station.com/station/onagawa>
祇園祭 2020年7月18日閲覧

<https://mainichi.jp/articles/20200717/k00/00m/040/319000c> 22時29分